

聖書: エステル記5章9～14節

説教: さばきの柱を立てる

はじめに

エステルが、ペルシャ帝国のクセルクセス王の王妃となってから五年が経ったとき、王の側近であるハマンが、ペルシャ帝国に在留するユダヤ人をすべて虐殺せよとの法令を發布したことで、ユダヤ人は大混乱に陥ります。モルデカイはこれを阻止しようとエステルのところへ向かい、「王のところに行って、あわれみを乞い求めるように」と依頼するのですが、エステルは「勝手に王のところに行く者はだれであろうとも死罪になるからできない」と言って最初は断る。しかしモルデカイは、「あなたが王妃となったのはこの時のためではないのか」と論じ、エステルは悩み苦しんだ末に、「死ななければならないのでしたら死にます」と覚悟を決め、王のところに出向くことにします。幸いにして王はエステルを快く迎えてくれただけでなく、「何を望んでいるのか」と親切に尋ねてくれたので、エステルは王とハマンを宴会に招待することにし、第一関門は突破しました。ところがもうひとつの大きな問題があった。クセルクセスは王の権威を示す印鑑をハマンに預けるほど絶大な信頼を置いていています。それに対して、エステルはハマンが出した法令には大きな誤りがあると言ってハマンを告発しようというのです。さすがになんの証拠もなしにそのようなことは言えません。言うからには王を納得させる証拠がなければいけない。ところがいまエステルの手もとにはハマンを訴える証拠がありません。ギリギリのところに追い込まれたエステルは、最初に宴会の席で自分の願いを打ち明けることは諦め、明日開く宴会の席で自分の願いをお伝えしますと言って切り抜けはしたのですが、明日の宴会までハマンを訴える証拠が見つかるのか、すべてを神にゆだねるしかなかった。それが前回までのあらすじです。このあとどうなっていくのか。神はどのように働かれたのかを見て参ります。

1 モルデカイ

1) エステルを気遣う

9節。「ハマンはその日、喜び上機嫌で去って行った。ところが、ハマンは、王の門のところにいるモルデカイが立ち上がろうともせず、身動きも

しないのを見て、モルデカイに対する憤りに満たされた。」

エステルはあらかじめモルデカイに、きょうの日に王との面会を試みると伝えておりました。王の好意を得ることができなければ殺されるかもしれないのですから、モルデカイはエステルのことが心配でたまりません。朝からずっと門とところにて、城の中から漏れてくる情報に耳を澄ましていました。そうしているうちにエステルはどうやら無事であることが伝わってきて、エステルが王とハマンを宴会の席に招いたとことまではわかった。しかしそこでエステルが、大切な用件を切り出したのかどうかまでは分からない。事態を見守っていると、ハマンが喜び上機嫌で城から出て来た。これを見てモルデカイは、エステルがまだ王になにも話していないことを悟ります。

2) ハマンに膝をかがめない

そもそもハマンが、どうしてユダヤ人を虐殺するような法令を出そうとしたのか。そのいきさつについても一度確認しておきます。かつてイスラエルが荒野を旅していたとき、アマレク人は、弱って集団から遅れて取り残されている人たちに襲いかかった。神はそのことをご覧になり申命記の中で「アマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない」と命じていました。モルデカイはこのみことばを忠実に守り、アマレク人の子孫であったハマンに膝をかがめない。その結果、ハマンが怒ってあのような法令を出した。今日の箇所でも、モルデカイは依然として膝をかがめません。

2 ハマン

1) いらだち

これを見てハマンは、はらわたの煮えくりかえる思いで家に帰り、友人たちと妻を呼んでこんなことを言う。11節。「ハマンは自分の輝かしい富について、また子どもが大勢いることや、王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれたことなどを、すべて彼らに話した。」

ハマンは、今で言えば天皇と皇后が出席する晩餐会に招かれたようなものです。それに加えて富もあるし、子どももたくさんいる、誰もがうらやむくらいこの世の幸せを手に入れたのですから満足なはず。ところがでそうではなかった。13節。「しかし、私が、王の門のところに座っているあ

のユダヤ人モルデカイを見なければならぬ間は、これら一切のことも私には何の役にも立たない。」

ハマンはモルデカイに比べたら、地位、財産、榮譽、すべての点で勝っているのに、頭を下げないことでいちいち腹を立て、ユダヤ人を皆殺しにしなければ気が済まない。どうしてそこまで極端な反応をするのか。このことはまた後で考えたいと思います。

2) 「モルデカイを柱にかけよ」

ハマンのいらだちと怒りを知って妻と友人たちは次のように助言します。14節後半。「高さ五十キュビトの柱を立てさせて、明日の朝、王に話して、モルデカイをそれにかけるようにしなさい。それから、王と一緒に、喜んでその宴会にお出かけなさい。」

五十キュビトと言えば、札幌時計台の時計がある屋根の高さほどで、それほどハマンの怒りと殺意は大きかった。しかし、城の中でそれなりの地位にあったモルデカイだったのですから、ハマンといえども勝手なことはできない。あしたの朝、王の許可をもらってモルデカイを処刑しようと企てます。

3 人の罪と救い

1) カインとアベル

こんなハマンの態度を見て、彼は極端な性格だったのだと考える方もおられるかもしれません。そうではないと思います。

創世記4章に、人類最初の殺人事件のことが書かれています。兄のカインと弟アベルの二人が主の前にささげ物を持って来たとき、主はアベルと彼のささげ物に目を留めたのに、カインと彼のささげ物には目を留めなかった。それでカインは腹を立て、アベルを殺してしまいます。カインが貧しい生活をしていただけではありません。むしろ何不自由なく暮らしていて、ささげ物のことさえなければアベルと仲違いすることなどなかったでしょう。ところが、神が自分に目を留めなかったことがきっかけとなって、大きな罪を犯していく。どうしてでしょう。アベルはもっているけれど、自分もっていない。そのことがどうしても許せなくて、どんどんねたみの火が燃え、とうとうアベル殺しに発展していったのではないかと。

このようなカインの罪の性質は、ハマンにもそのまま受け継がれています。彼は王の側近として働くという榮譽とこの世の富を手に入れ、何も不自

由なことではない。けれどもモルデカイを見た時、頭を下げようとしないのでいらだつ。なぜか。プライドが傷つけられたから。なぜプライドが傷つくのか。彼は目に見えるものを所有していることが幸せがあると信じている。ところが、モルデカイは目には見えないけれど、何か大切なものをもっている。けれどもそれが自分には。それでいらだっているのではないかと。「これら一切のことも私には何の役にも立たない」と叫んで、モルデカイを殺さなければとエスカレートしていく。モルデカイにはあったのに、ハマンにはなかったものとは何だったのか。そのことを次に考えます。

2) 神の義に立ち続ける

モルデカイはどこに立っているのでしょうか。ハマンがアマレク人の子孫であることを知ったとき、例え相手がどんなに自分よりも高い地位にあって、王の信頼を得ていた人物であろうとも、彼は聖書のみことばに従うことを優先し、膝をかがめなかった。どこまでも神の義に立ち続けようとし、しかしそれは命懸けのこともありました。彼は娘同然のエステルがこう言わせなければならなかったのです。「私は、死ななければならぬのでしたら死にます。」それほどまでして、神の義に立ち続けようとしていたモルデカイにハマンはいらだち、モルデカイを木につるして自分の手でさばくために二十メートルにも及ぶような木を立てさせていきます。

3) イエス・キリストの救い

頭を下げないことで、ここまで腹を立てるのかと不思議に思われるかもしれません。では、ハマンは私たちと違う人間なののでしょうか。いいえ。イエス・キリストの十字架のことを思い起こしてください。私たちは、この方を木につるしてさばいたのではないですか。なぜつるそうとしたのでしょうか。この方を見て、いらだったからではないですか。貧しい方であるはずなのに、自分にはない何かをこの方がもっている。この世の富も榮譽も何の役にも立たないほどの、すばらしいなにかをもっている。そのことを嫉んで殺したのではないかと。だれがそうしたのか。普段はおとなしく、悪いことをするような人たちではない、ごく普通の善良な人たちが、そうしてしまう。そこに自分もいたのです。

そのときイエスは、どうされたか。十字架の苦しみの中にあっても神の義に立ち続け、最後にはご自分のいのちをお捨てになります。それを見て人々

は、勝ち誇った。しかし、この方が三日目によみがえられたとき、私たちは初めて、どうしてこの方にいらだったのか、なぜ殺そうとしたのか、その理由がわかった。自分にはなくて、この方にだけしかないもの、この方にこそ神の義から来る永遠のいのちがある。この方を木につるした私たちこそが、実はさばかれなければならなかったのだということを知ったのです。

それほどの罪を犯した私たちです。どこかに救いはあるのでしょうか。もともと私たちのうちに神の義などはありません。自分の努力で救われることは絶対にできない。

では、弟アベルを殺したカインはどうやって救われていったのか。自分がしてしまったことに気がついた時彼は告白しました。「私の咎は大きすぎて、負いきれません。」これを聞かれた神は、カインの罪を赦し、「カインを殺す者は七倍の復讐を受ける」と語って、カインを守っていく。私は罪を犯しましたと言う者に、神はご自分の義を与えてくださいます。私たちの目に不公平に見えるほどに、罪を告白する者を神は許し迎えてくださる。このようなあわれみの神に感謝しつつ、歩んで参ります。